

平成 28 年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

北欧の教育から考える放課後活動支援

調査地：フィンランド ヘルシンキ市、スウェーデン スtockホルム市

調査日：平成 28 年 10 月 4 日～10 月 7 日

一般財団法人 地域活性化センター

総務企画部 移住・交流推進課

坂東 彩加

目 次

1	はじめに	P.1
2	名寄市の現況と課題	
	(1)名寄市の現況	P.1
	(2)名寄市の課題	P.2
	(3)名寄市の取組	
	①移住・定住の取組	P.2
	②子育て・教育の取組	P.3
	③芸術・文化の取組	P.3
3	フィンランドの取組	
	(1)フィンランド概要	P.4
	(2)ヘルシンキ大学附属ヴィーッキ小学校の教育	P.5
	(3)ヘルシンキ大学附属ヴィーッキ小学校の学童保育	P.6
4	スウェーデンの取組	
	(1)スウェーデンの概要	P.7
	(2)プレスクール・クレルビッタン （クレーンビッタン） の教育	P.8
5	北欧教育の共通点	P.9
6	名寄市でどう生かす	P.10
7	さいごに	P.11

1 はじめに

日本の人口減少が止まらない。2014 年(平成 26 年)の合計特殊出生率は 1.42 と 9 年ぶりに低下し、年間出生数は約 100 万人と過去最低を記録した。出生率が向上しなければ、地方のみならず日本全体が深刻な人口減少の事態を迎えると危ぶまれている中で、現在、国及び地方公共団体は、人口減少に歯止めをかけるために、地方創生の視点から少子化対策を一層推進し、地方創生を目指す「まち・ひと・しごと創生」に取り組んでいる。

人口減少が進む中で重要なキーワードとなるのが、「次世代に繋がるまちづくり」であり、人材育成の重要性も高まっている。初等教育については、これまで日本は世界の中でも上位に位置していたが、近年では学力の低下も問題となっている。そのほかにも、家庭や地域の教育機能、教員のレベル、子どもの学習意欲の低下、いじめ、不登校、うつ病など、教育における問題は多様化し山積している。このため、今日の日本においては、学校、地域、家庭を含めた新しい教育における連携やしくみづくりが求められている。

今回の地域づくり海外調査研究事業調査にあたり、行政の観点から教育の現場に関わり、新しい取組ができないかという考えのもと、「子どもの放課後」に着目した。その参考として、教育の先進地といわれる北欧のフィンランド、スウェーデンの教育機関を視察先とし、その概要と取組事例から、当市における子どもの放課後活動を充実させるための取組について考察していくこととする。

2 名寄市の現況と課題

(1)名寄市の現況

名寄市は北海道の北部に位置し、名寄盆地の中央にある農業が主要産業の田園都市である。内陸部に位置しており、年間の寒暖差が大きな年で約 60℃あるが、夏季は日中暑くても夜は涼しく大変過ごしやすい気候である。また、そのような気候が農作物の甘みを増す一因にもなっている。中でも、もち米の作付面積は日本一を誇り、おいしさや品質が高いことが認められ、伊勢の赤福や岡山の廣榮堂のきびだんごの原料その他に、アスパラガスやとうもろこしなどの



出典:テッショペツおいしさ発信ショップ

冬季の寒さは厳しいが、「なよろの冬を楽しく暮らす条例」という珍しい条例を制定し、厳しい冬を逆手にとって、スキーやカーリング、ほのかな雪あかりを灯すスノーランタン作成など様々な取組を行い、長く厳しい冬を楽しめるよう努力している。最近では、日本初の試みとして、駅前商店街でまちなかローラースキーのレースを行うなど、市民を巻き込んだスポーツ振興とまちの活性化にも取り組んでいる。人口約3万人と人口規模は小さいが、24時間体制の小児科を設置した総合病院、市内循環バス、市立の4年制大学、日本で2番目に大きな望遠鏡を設置した天文台など、多くの都市施設を備えたまちでもある。

市民活動も盛んで、公民館や体育施設などの社会教育施設で文化・芸術・スポーツ・勉強会等の活動を行うために登録されたサークル・グループ・少年団は約 106 団体ある(2017 年(平成 29 年)2 月現在)。また、2015 年(平成 27 年)5 月に市民ホールの建て替え及び文化センターの改築により、道北の文化の拠点が整備されたことで、市民をはじめ、近隣市町村の住民が身近に文化や芸術に触れたり、発信する機会も増えている。

(2) 名寄市の課題

豊富な農作物や生活環境、活動拠点に恵まれ、様々な市民活動が行われている名寄市であるが、人口は、1968 年(昭和 43 年)の 39,037 人をピークに減少が続いており、2017 年(平成 29 年)1 月 31 日現在では 28,226 人となっている。2015 年(平成 27 年)の国勢調査では、その前の 2010 年(平成 22 年)調査の 30,591 人から 29,060 人と、1,531 人減少して減少率が 5.0%となり、上川管内にある 4 市の中で減少率の高さは 3 番目となった。また、町村も加えると 4 市 19 町村(計 23 市町村)のうち、19 番目に高い減少率となっている。なお、このうち、人口増になっている市町村は 2 町のみであった。

さらに、年少人口については、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、2015 年(平成 27 年)は 3,601 人だが、2040 年には 2,642 人と、26.6%の減少率が見込まれており、今後もさらに減少傾向が続いていくことが予想される。近年では、児童生徒数の減少により、風連日進小中学校が 2013 年(平成 25 年)3 月 31 日に廃校となり、2016 年(平成 28 年)3 月 31 日には、東風連小学校、豊西小学校も廃校となった。学校は、地域にとって地域活動や住民のつながりを生み出す中心的な存在であるがゆえ、閉鎖によって、地域の活力の低下や人同士の繋がり希薄化が進んでいる。

また、文化・芸術の面を見てみると、日々、市民主体の芸術・文化活動が行われ、文化祭や様々な発表会などのイベントも実施されている。一方で、そういった多くの文化資源や素材がありながら、行政・市民の間でも共有・認識がされていなかったり、イベントや市民活動同士の連携が少ないなど、それぞれがバラバラで有効活用されていないという課題を抱えている。今後は、市民と行政の間で連携し、協働で行う活動や取組が必要であると考えられる。

(3) 名寄市の取組

① 移住・定住の取組

さらなる人口減少傾向が続いていくことが予想される中、名寄市では 2012 年(平成 24 年)5 月から市への移住者を対象として、民間団体と市が連携・協力し、市への移住促進及び地域の振興を図ることを目的に、名寄市移住促進協議会を設立した。移住促進に係る情報発信として、ホームページでのほか、お試し移住用の住宅の設置や都内での移住相談会などを開催している。また、同時期に交流人口の増加、移住定住人口の拡大を図ることを目的とし、天塩川周辺の名寄市を含む 13 市町村で構成される「テッシ・オ・ペツ賑わい協議会」が立ち上がり、広域での移住促進事業にも取り組んでいる。

当市のまち・ひと・しごと創生総合戦略においても、「人の流れを呼び込み、ここに行きたい、ここで暮らしたいと思われるまち」を目指し、基幹産業である農業の担い手の確保や企業誘致、創業支援等により、地域産業の活性化や新たな雇用の創出を図るための取組を進めることとしている。また、冬季スポーツ大会や合宿の誘致等により、地域産業の活性化と定住人口や交流人口の拡大を図る施策を推進することで、移住先の選択肢となるような、住みたいまち・住んでよかったまちを目指している。

②子育て・教育の取組

今後の人口減少を抑制させるためには、子どもを持ちたいと思う人々の希望を実現し、出生率の向上を図る必要がある。本市の合計特殊出生率及び女性の有配偶者率は全国より高い状況にあり、本市で実施したアンケート調査では、理想とする子どもの数及び予定子ども数を基に算出した希望出生率は1.88人となっている。このことも含め、名寄市まち・ひと・しごと創生総合戦略の「人口の将来展望」においては、市内の今後理想とする子ども数を実現するため、子育て支援策の充実を図ることとし、「ここで育って、ここで育てよかったといえるまち」を目指している。

具体的には、子育て支援センターをまちなかに移転し利用者の拡大を図るとともに、気軽な子育て相談、情報交換、親子遊びの体験広場など、子育て中の保護者同士のコミュニケーションを充実させ、友達の輪、子育ての輪を広げることのできる環境整備を図っている。また、この施設は、子どもが思い切り走り回って遊べるスペースを確保したプレイルームをはじめ、授乳室も設けた乳児専用の子育て支援スペースが整備されているほか、屋外スペースは庭全体が芝生化され、子どもたちが転げまわって遊べるような空間となっており、大人も子どもも過ごしやすいよう配慮されている。

教育の面においては、市内12校の小・中学校のうちの 하나가、コミュニティ・スクールとして地域住民と学校の連携により設置運営されている。また、学校内にコミュニティセンターを設置し、施設を活用した生涯学習活動や地域活動が進められている小学校や放課後児童健全育成事業として、学童クラブが校内に設置されている小学校もある。さらには、市と社会福祉協議会、名寄市立大学社会福祉学科の連携により、食や学を通じて健全な子どもたちの成長を支えるため、子どもの居場所・子ども食堂・子どもの学習支援についての取組も始まっている。この活動は、主に文化センターを拠点としており、色々な学校から子どもたちが集まり、居場所としてだけでなく、他校の子どもと交流や繋がりが生まれる場にもなっている。

③芸術・文化の取組

2013年(平成25年)度から、交流自治体である杉並区の芸術会館「座・高円寺」の芸術監督を務める佐藤信氏を芸術文化アドバイザーに招き、市内の芸術・文化活動に関わる人たちのニーズを拾いあげるとともに、芸術面で地域の個性を育て、発信できるようなまちづくりにも力を入れている。また、2016年(平成28年)には、どさんこ青少年オーケスト

ラ協会と連携し、子どもたちの文化芸術の向上と日本最北のジュニアオーケストラ発足を目指すことを目的とした市民講座「バイオリン体験教室」を開催した。半年をかけて全 7 回実施し、幼児から中学生までの子どもとその保護者合わせた約 30 人で組織する日本最北のオーケストラ「名寄市少年少女オーケストラ」の発足に繋がった。このように、子どもたちが芸術・文化に触れる機会を増やす取組を行っている。

3 フィンランドの取組

(1)フィンランドの概要

フィンランドは北ヨーロッパに位置する共和制国家であり、その人口は約 520 万人で、北海道の人口約 538 万人よりも少ない。首都のヘルシンキ市は、人口約 60 万人のバルト海に面する都市である。市の面積は 213.8 km²で、市街地は歩いて簡単に回ることができるほどの広さであり、デザインや建築、カルチャー、ショッピングを楽しむスポットも多くある。また、森林が国土の約 7 割を占め、19 万を超える湖、そして 18 万もの小島が散在するなど、自然環境にも恵まれている。



出典：北欧旅行フィンツアー

また、教育や福祉の水準も高く、子どもたちには国内のどこにいても、通学手段、給食、教科書や学用品が無償で提供され、同様の質の教育を受けられることが保障されている。年間の授業日数は 190 日であり、OECD(経済協力開発機構)加盟 34 カ国中で最も少ないが、OECD の生徒の学習到達調査(PISA)の国際学力テストでも常に上位に位置している。「すべての子どもがわかるまで」「競争させることよりも学ぶことの意味を理解させる」を基本に、結果平等の教育が徹底され、学習に困難が生じている子どもに対しては、即座に特別支援教育によるケアが実施されている。

教員養成の観点からみると、教員資格を学士ではなく、修士取得とするなど、その養成に力を入れている。教員養成を行う学部・学科への入学は厳しく、優秀でモチベーションの高い人材が集まっている。また、実習が教員養成のプログラムの中でも重要視されている。具体的にいうと、養成コースが担任コースと教科専任コースの 2 種類に分かれており、前者は最低 312 時間、後者は最低 520 時間教育実習の時間を設け、より良質な教員を育てている。以上のように、フィンランドは教育の平等性と教師の質の高さが特徴の国であるといえる。

次に、学童保育についても触れておきたい。フィンランドには大きく分けて 2 種類の学童保育がある。一つは学校内または法人が運営する学童保育であり、もう一つはレイキップと呼ばれる児童公園である。前者は月額 7 千～1 万円ほどの月謝がかかり、休暇中の実施はない。開館時間は放課後から 17 時までで、国家教育委員会が管轄し、専門の指導員が子どもを見守る。後者は無料で利用することができるが、おやつ代は別途発生する。休暇中も運営されており、9 時半から 16 時半まで運営している。管轄は自治体の幼児教育保育局で、ソーシャルワーカーを含む複数のスタッフが常駐している。フィンランドは共働

きの家庭が多いため、主に家に一人でいるのが不安な子が預けられている。中には学童保育に通わず近所の公園で遊んだり、習い事をする子どももいる。

(2)ヘルシンキ大学附属ヴィーッキ小学校の教育

この小学校は教育養成を行う大学の附属の小学校である。そのため、年間を通して約 350 人の学生を教育実習生として受け入れており、視察の際にもほとんどのクラスで実習生が授業を行っていた。当校の教育実習は、指導案を書く前に実習生と教員が話し合い、2 人 1 組の実習の後、再度両者で実習を振り返り、次の授業に反省点を生かすプロセスを繰り返して、授業と将来の教員の質を高める工夫がされている。

また、1 クラスは 20 人ほどの少人数制で、教員が一方向的に指導するのではなく、児童参加型の授業で、先生の問いに対し自由にディスカッションしたり、自ら考える時間が多く設けられている。教員は児童が出した答えを否定することなく、あくまでも児童が主体的に考え、表現することを大切にしている。例えば、ある生き物の写真を 1 枚見せて、自由に感想や疑問を発言し合い、それに対し、答えを教えるのではなく、自分たちで調べたり、話し合ったりし、自ら知識を身に付けていく手法をとるといような工夫がされている。

このように、五感を働かせながら、自ら考え、意見を共有し、体験を通して学習に取り組むことにより、楽しみながら知識を身に付けている様子が伺えた。また、森林の多い自然環境を生かし、授業ではよく森に出かけ、自然の中で見つけたものを授業の題材に取り入れることも多いそうだ。

なお、テストについては、教員により小テスト程度はあるものの、ほとんど実施されていないようで、点数もつけていない。児童の疑問やつまづきにその場で対処することを大切にしており、早期発見及び支援することに努めていることも特徴の一つとしてあげられる。

以上のことから、教育の質の高さを基礎とし、競争ではなく、平等性を重んじる教育を行っていることがフィンランドの教育の特徴であることを視察先の小学校の事例から学ぶことができた。



▲活発に意見交換が行われる授業の様子



▲教育実習生はチームで授業を行う



▲成果物が教室の内外に多く飾られている



▲カラフルで発想豊かな芸術作品

(3)ヘルシンキ大学附属ヴィーッキ小学校の学童保育

ヘルシンキ大学附属ヴィーッキ小学校には家に帰っても親がいない小学校 1～2 年生を対象に、学校内に学童保育専用の教室が設置されている。教室のそばには、走ったり転げまわったりできる、廊下と繋がったミニ多目的ホールのようなスペースがある。また、外の広場に通じるドアも教室のすぐそばにある。約 40 人の児童が利用しており、9 割が 1 年生、1 割が 2 年生となっている。この割合となる理由は、家に一人であることがより困難な年齢の低い者を優先して利用登録するようにしているためだそうだ。

学童保育内で、児童はまず指導員の元に行き、自分が来たことを伝える。その後は部屋中のロッカーや机に置かれた様々な遊び道具で思い思いに遊んでいた。例えば、色鉛筆やペン、絵具、ヒモ、テープなど色々な文房具、毛糸、布、画用紙、パーラービーズ、本、トランプ、アルファベット磁石などが常備されている。

指導員は部屋の中に 2 人おり、指導をするのではなく子どもたちを優しい視線で見守っている様子だった。また、子どもから求められれば一緒に遊んだりもしていた。普段通う小学校の校舎内に設置されているということもあり、子どもたちは安全な環境の中で自分の好きな活動に夢中になれる様子だった。

そのほかに、台所やいくつかのソファがあり、時々お菓子を作ることもあると伺った。また、おやつ時間の後は外に遊びに行ったり、体育館に行くなど、なるべく体を動かす機会を与えるようにしているとのことだった。指導員は授業の時間内も学校内にいるため、放課後だけでなく、普段の児童の様子も見るように心がけているそうだ。一方で、あくまでも授業の時間と学童保育は別物として位置付けられているため、現状、クラス担任と児童一人ひとりの状況を共有しあうなどのシステムはないとのことであった。



▲思い思いに好きな道具で好きな遊びをする様子



▲教室の外に体を動かせる遊び場がある



▲教室の棚中に遊び道具が収納されている



▲遊び道具は用途により整地して収納されている

4 スウェーデンの取組

(1)スウェーデンの概要

スウェーデンは北ヨーロッパのスカンジナビア半島に位置する立憲君主制国家で、約 988 万人の人口を有し、面積は日本の約 1.2 倍の約 45 万km²である。首都のストックホルム市は、人口約 93 万人で、北欧を代表する世界都市である。市の面積は 188 km²で、IKEA や H&M、スカイプなどの拠点があり、デザインや IT に優れた都市でもある。また、高福祉・高負担の包括的な社会保障制度は、少子高齢化する日本にとって参考としてあげられることも多い。OECD(経済協力開発機構)が行う国別幸福度調査でも上位の常連である。



出典：北欧旅行フィンツアー

学校の年間の登校日数は 178 日と少なく、日本より約 1 か月短い。大学まで授業料は無料であるが、18 歳で成人すると親には扶養義務がなくなる。それゆえ、親元から大学に通えない場合、生活費は子どもが自分で支払うこととなる。将来何になりたいか決まっていない子どもは就職して社会勉強をしたり、色々なものを吸収しに海外旅行に行く場合が多く、大学進学率は日本より低い数値となっている。日本のように、就職時に大学新卒という身分が重要視されることはなく、あくまで個人のもつ学歴・職歴や資格が重要視されるということが高校卒業後の進路の選択肢の幅を広げている要因となっているといえる。

スウェーデンでは1998年(平成10年)に幼稚園と保育園がプレスクールとして一元化され、厚生省から文部省の管轄になった。1970年代以降、専業主婦が減っていき、ほとんどの女性が出産後も働くようになったこと、また、保育時間の短い幼稚園のニーズが低くなり、保育園のニーズが高くなっていったことが背景にあたる。プレスクールとは、学校に保育機能を持たせたもので、管轄が文部省となったため、保育士は「学校の先生」として位置づけられるようになった。スクール内では、高校卒業資格でなることのできる保育士と、大学の専門科を卒業してなるプレスクールティーチャーによって保育が行われている。ティーチャーはリーダーとして保育の進め方やプログラムを決め、複数の保育士と共にチームで保育を行っている。また、具体的なカリキュラムやプログラムは、自治体と各スクールに一任されている。

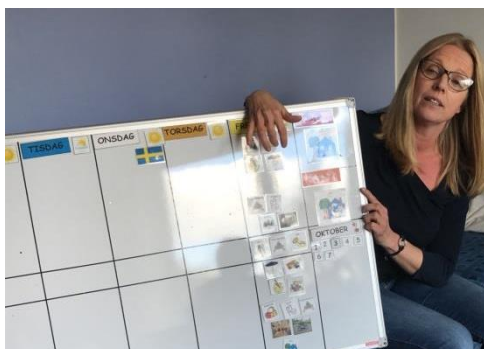
(2)プレスクール・クレルビッタン教育

視察先として訪れたプレスクール・クレルビッタンは、2008年(平成20年)に開園したストックホルム市立のプレスクールである。この学校を始めとした多くのプレスクールは、環境や環境問題に対する興味・関心を高め、必要な知識・技術・態度を習得させるための「環境教育」に取り組んでいる。クラスは1歳から6歳まで年齢ごとに分かれており、1クラス15～20人程度に対し、教員が3～4人ついている。

午前と午後の活動前にミーティングが行われるが、午前のミーティングでは、今日の天気、何をどこでやるのか、外に行く場合はどこに行くのか、何を準備したらよいかなどについて、子どもたち全員と確認することを日課としている。この確認作業は場所や行動を表すイラストや子どもの顔写真がついたマグネットを使って行われており、子どもたちの意思表示を視覚的に表す工夫がされている。

午後はテーマ分けをして活動しており、科学や芸術、生物などあらかじめ設定されたテーマごとの教室に分かれ作業が行われる。子どもたちは好きなテーマを選べるが、あまり人数が固まったり、一人が同じテーマばかりを連続して選ぶことのないよう、教員が聞き取りや助言をしてチームを分けるよう配慮している。また、どんなテーマを選んだ場合でも、国語、数学、科学、芸術の要素が取り込まれる。例えば、バクテリアについて学ぶ場合、色を想像してみたり、足が何本があるのか意見を出し合ってみたり、人間と同じくらいの大きさのバクテリアをイメージした作品を作ってみたりというような作業が行われている。

これらの教育活動において一貫して心がけられていることは、教員が子どもたちを誘導することなく、子どもたちの興味や成長にあったアプローチをとっていることである。また、成果物は園内の至る所に展示されており、どれも色鮮やかで完成度の高い芸術作品に見え、一つひとつの作品が大事に取り扱われていることを感じる事ができた。また、例えばアルファベットを覚えるきっかけになるよう、床にもアルファベット順に子どもたちの名前が印刷されたカードが貼られているなど、日常のちょっとした空間に遊ぶ感覚で学べる工夫が散りばめられていた。



▲ミーティングでは今日の予定を確認し合う



◀ バクテリアをイメージした作品を制作



▲教室内には表現道具や作品がずらり



▲吊り下げて展示しているものを多くある

5 北欧教育の共通点

以上のように、フィンランドの小学校及びスウェーデンのプレスクールの教育現場を視察したが、両現場から見てきた共通点について大きく三点にまとめたい。

一点目は、日本のような詰め込み教育またはテストありきの競争意識を生む教育ではなく、一人ひとりをよく観察し、個々に意識を向けた教育を行っている点である。二点目は、子どもたちがそれぞれの意思を表現する機会が多く与えられており、表現した思いや気持ちが、教師をはじめとする大人にきちんと受け止められている点である。また、学校での生活の中で自己決定の機会が多く与えられているため、それを安心して表現することの積み重ねにより、自立心や自己肯定感、社会で生きていくことへの安心感が育まれていくのではないかと感じた。三点目は、学ぶ意欲を引き出す工夫が多く見受けられる点である。子どもたちが「勉強」ではなく、「遊び」の感覚で、学ぶ楽しさや好奇心がわくように授業方法や問いかけの仕方を工夫していた。また、教員が正解を教えてしまうのではなく、「どうしてそう思ったの」「どうしてそうしたの」と問いかけ、自分たちで調べたり答えを出せるように、観察し、寄り添いながら子どもたちに接する態度も特徴のひとつだった。

6 名寄市でどう生かす

北欧の教育は、教育の機会が平等に与えられ、大人に見守られながら、子どもがやりたいことをやりながら、経験的に学んでいるのが特徴だった。一方で、日本の教育には地域などによる格差があるのではないだろうか。私自身も田舎町で育ち、都会と比べて情報量の違いや教員の質、授業の方法などに差があると肌で感じてきた部分がある。

首都圏はもとより、札幌市や旭川市など北海道の中心都市とも決して近いとはいえない名寄市だが、このまちに住むことで、「子どもに豊かな教育環境が与えられる」「色々な経験ができる」、そして「このまちに住んでよかった」と思ってもらえることを目指し、以下について提案したい。

名寄市には文化センター及び市民ホールという芸術・文化の拠点がある。近くに住む子どもたちの憩いの場にもなっているが、改修工事により設置する機材が増え、ボール遊び等で使えない部屋ができてしまうなど、子どもたちにとっては使い心地の悪いものになっていった面がある。体を使って遊べなくなった分、カードゲームや携帯ゲーム機などで遊ぶ時間が増えてしまった。

ここで、放課後の時間を年間で算出するとどれくらいになるのか考えてみたい。1日の放課後の時間を14時から17時までとすると、年間744時間の放課後の時間があることになる。

【式】 平日の日数(248日/年) × 1日の放課後の時間(3時間/日) = 放課後の時間(744時間/年)

この時間をテレビゲームなどに費やすか、なにか他のことに費やすかで、大きな違いが生じるのではないだろうか。文化センター内には、会議室だけでなく、和室や調理室、多目的ホールなどがあるが、すべての部屋が常時使われているわけではない。また、あまり使われることなく、眠っている道具も数多くある。例えば、絵具、調理器具、ピアノなどの楽器、囲碁、室内雪合戦の道具などである。これらの文化センターにあるものを活用して、子どもが自由に発想、創作できる場所にできないだろうか。学校の授業以外の場だからこそ、自由に発想し、自己表現できる場になるのではないかと思う。また、家庭の事情により、部活動や習い事ができない子にも新たな趣味や特技、やりがいを見つける場になりうるのではないかと考える。さらに、すでに当施設で行われている子どもの居場所づくりや高齢者大学、サークル活動などと連携できれば、多世代交流の場にもなる可能性がある。

一つひとつの組織やグループは、どうしても閉鎖的になりやすいが、その一方で繋がりや新たなやりがいを求めている場合も多い。よって、なんらかのスキルをもつ「人」を有効活用し、子どもたちと繋がりを持たせることができれば、教える側も教えられる側にとっても、生涯学習の幅が広がっていくと思う。また、もし何らかの理由で学校に居づらさを感じているような子どもも、新たな繋がりややりがいを発見することができれば、学校で感じている疎外感を薄くする役割も担えるかもしれない。子どもの中の社会は、学校と家庭だけになってしまうことが多いが、小さな頃からもっと社会は多種多様な世界であることを認識できれば、新しい居場所を見つける機会に繋がると考える。

7 さいごに

今回の視察を通して、大人は子どもに丁寧に接しているつもりでも、それは介入のしすぎや干渉であって、それは子どもの自由な発想や意見の主張を抑制することになり、子どもの成長を阻む原因の一つになっていることもあるのではないかと感じた。もっと子どもを信用し、一人の人間として向き合い、なんでも先回りするのではなく、「聞くこと」を大切にしていくことが子どもと向き合う上で重要なことなのかもしれない。

日本の子どもは自分の気持ちや考えを表現することが苦手といわれているが、コミュニケーションを重ねていくことで、気持ちを引き出すことに繋がっていくはずだ。大人は傾聴することを諦めず、子どもに寄り添いながら、彼らが必要とするものやことをサポートできるよう備えをしていくべきだと思う。

自治体は乳幼児から高齢者まで幅広い世代に関わりを持たせることのできる団体である。だからこそ、それぞれの世代に向けた施設や設備を持ち合わせている。また、色々な世代やグループとの繋がりをもっている。それらを子どもたちのニーズに生かすことができる機会や手段が多くあると思う。今後は、子どもたちが過ごしやすく、新たな体験に出会ったり関心をもてるようなきっかけづくりや、やりたいことをサポートできるような土壌づくりができればと考える。

最後に、今回の調査にあたり、快く視察を受け入れていただいた、ヘルシンキ大学附属ヴィーッキ小学校及びプレスクール・クレルビッタン職員の皆様、そして、視察地と日程調整にご尽力いただいた株式会社ツムラーレコーポレーションの河村氏、通訳及び現地案内、ご自身の暮らしぶりについても教えてくださったマキコ・ロミ氏、エミル・オストベリ氏に心から感謝を申し上げ、本報告書の結びとしたい。

【参考文献・資料】

- ・平成 28 年版少子化社会対策白書概要版
(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2016/28pdfgaiyoh/28gaiyoh.html>)
- ・なよろの冬を楽しく暮らす条例
(http://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=1&ved=0ahUKEwiWw-2u58DSAhUCbbwKHQZMAYMQFggfMAA&url=http%3A%2F%2Fwww.city.nayoro.lg.jp%2Fsection%2Fkikaku%2Fvdh2d10000001lip-att%2Fvdh2d100000011vz.doc&usg=AFQjCNG8wjDHpqIEZSA1z2_pYnmCOzD1xg&sig2=rb5CwLhEhzi0f0rs-0IfnQ)
- ・名寄市の人口
(<http://www.city.nayoro.lg.jp/mobile/section/shimin/vdh2d10000003tph.html>)
- ・国勢調査(名寄市) (<http://www.city.nayoro.lg.jp/mobile/index.html>)
- ・国立社会保障・人口問題研究所(<http://www.ipss.go.jp/>)
- ・名寄市まち・ひと・しごと創生総合戦略
(<http://www.city.nayoro.lg.jp/mobile/section/kikaku/prkeq1000000c3pf.html>)
- ・名寄市子ども・子育て支援事業計画
(<http://www.city.nayoro.lg.jp/mobile/section/kodomo/prkeq1000000gsu1.html>)
- ・平成 27 年国勢調査(北海道分・速報)
(<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tuk/001ppc/10pwsokuhou.htm>)
- ・フィンランド大使館、東京
(<http://www.finland.or.jp/public/default.aspx?nodeid=46057&contentlan=23&culture=ja-JP>)
- ・『スウェーデン保育の今 テーマ活動とドキュメンテーション』白石淑江・水野恵子、かもがわ出版、2013 年
- ・『安心・平等・社会の育み フィンランドの子育てと保育』藤井ニエメラみどり・高橋睦子、明石書店、2007 年
- ・『子どもの放課後を考える 諸外国との比較でみる学童保育問題』池本美香、勁草書房、2009 年
- ・『しあわせな放課後の時間 デンマークとフィンランドの学童保育に学ぶ』石橋裕子・糸山智栄、中山芳一、2015 年